



創立1880年
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館6階
Tel 03-6302-1960
URL http://tokyo.ymca.or.jp
発行所 公益財団法人 東京YMCA
発行人 菅谷 淳

東京YMCA



2021年

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

東日本大震災10年

終わらぬ復興 生活再建はこれから



特に被害が大きかった石巻南浜・門脇地区の現在。復興工事はほぼ完了したが戻ってきた住民は3割という



清水 弘一さん
仙台YMCA常議員会議長
石巻広域ワイズメンズ
クラブメンバー

東日本大震災から10年が経ちました。今なお復興の途上にあるといわれる被災地の思いを、仙台YMCA常議員会議長で「石巻広域ワイズメンズクラブ」メンバーの清水弘一さんに聞きました。同クラブは、震災直後に東京YMCAが設置した「YMCA石巻支援センター」の活動を継ぎ、仙台YMCAと連携しながら幅広く活動展開しています。(広報室)

※「石巻広域ワイズメンズクラブ」

「ワイズメンズクラブ」は、世界66カ国で活動する国際的な奉仕団体。日本には140のクラブがあり各地のYMCAをサポートしている。「石巻広域ワイズメンズクラブ」のフェイスブックはこちら⇒



↑現在の「YMCA石巻センター」と「石巻広域ワイズメンズクラブ」の拠点(日本キリスト教団石巻栄光教会2階)



2011年秋に開設した旧「YMCA石巻支援センター」。この2階で国内外からのボランティアを受け入れ、支援活動を行ないました。

と、地区の社会福祉協議会から相談を受けて実施しています。仙台YMCAの協力もあり、好評です。今後どんな活動を5月には神戸のクラブと共催でオンライン・コンサートを予定しています。年内には仙台の子どもたちとの交流キャンプも計画しています。また資金集めのため地場産品の販売も始めました。

おかげさまで石巻では、YMCAとワイズメンズクラブの名前が徐々に浸透してきました。子ども文庫には、近隣小学校の子どもたちも来てくれます。また石巻には、復興支援活動のために他県から来た若者がそのまます仕事を見つけて移住したケースもたくさんあります。今後はいろいろな団体とも手をつなぎ、震災復興支援を越えて市民力をつけ、町を活性化していきたいです。

「あつという間の10年だった」と言う人もいれば、家族を亡くされた人などは「時が止まったまま」と言う人もいます。石巻は4000人が犠牲になりました。最近になってようやく当時の出来事を話せる状態になったという方もいます。心の復興はいつまでかかるといえるのでしょうか?

「水産業の低迷の原因は何ですか?」温暖化が原因といわれていますが、サンマやイナダなどの漁獲量が激減してしまっただけです。知人の缶詰工場も、津波で全壊した後やっと再建した

「そんな中で「石巻広域ワイズメンズクラブ」の皆さんは活発に活動しています。」私たちのクラブは、震災直後に東京YMCAが設立した「YMCA石巻支援センター」を拠点にして、2016年に設立されたクラブです。現在のメンバーは22人。家を流された人、家族を亡くした人、そんな人たちが町の復興のために集まっています。仙台YMCAとともに活動しています。

「ヨガ教室もされていますね。」復興住宅のお年寄りのひきこもり対策をしたい

「なになにをしようとしている」の意である。答えは当然多様であろうが、その中に「YMCAがこの社会に何が出来るか、何が共感を得られるかを考えたい」という回答が多くあつて欲しいと思う。「どさ」に「Y」と天下晴れて言えるようになった時、新たな取り口も持っていきたい。

「雪の道を角巻きの影がふたつ。」「どさ」「ゆさ」。出合い頭の暗号のような短い会話だ。それで用は足りた。」「ああ、どちからまで」「どさ」「ちよつとお湯へ」「ゆさ」。60年代初めごろ朝日新聞に連載された「新・人国記」の「青森県」の書き出しである。これを拝借して2000年に『どさ』『ゆさ』と書いたことがあった。YはもちろんYMCA、私にとって、ワイズメンズクラブでもあった。YMCAに行けば仲間がいて、出合い、語り合いがあり、怒ったり笑ったりしながらプログラムを楽しみ、学びと親睦を深めてそれが活力になった。現在は「Yさ」とは言い難く、いわば得意技が封じられた感がある。問いかけて同じ津軽ことばの「どひゃ」と変えたらどうだろう。「なににしてる」「なにをしようとしている」の意である。答えは当然多様であろうが、その中に「YMCAがこの社会に何が出来るか、何が共感を得られるかを考えたい」という回答が多くあつて欲しいと思う。「どさ」に「Y」と天下晴れて言えるようになった時、新たな取り口も持っていきたい。

「だいたい町並みが新しくなりました。」昨年やっと復興住宅が完成し、県内全域で仮設入居者がゼロになりました。道路や公園も整備され、ハード面の復興事業がようやく終わりに近づいてきた状況です。

「暮らしはどうですか?」まだ町に活気が戻ってきたとはいえません。一番の問題は震災前より人口が減ったことです。石巻では14%、女川町では39%減りました。特に若い世代は仙台などに避難した後、教育や仕事の都合で戻ってこなかったの

「風化の防止と町の活性化へ」

「動画もたくさん公開されています。」

「おかげさまで石巻では、YMCAとワイズメンズクラブの名前が徐々に浸透してきました。子ども文庫には、近隣小学校の子どもたちも来てくれます。また石巻には、復興支援活動のために他県から来た若者がそのまます仕事を見つけて移住したケースもたくさんあります。今後はいろいろな団体とも手をつなぎ、震災復興支援を越えて市民力をつけ、町を活性化していきたいです。」

「雪の道を角巻きの影がふたつ。」「どさ」「ゆさ」。出合い頭の暗号のような短い会話だ。それで用は足りた。」「ああ、どちからまで」「どさ」「ちよつとお湯へ」「ゆさ」。60年代初めごろ朝日新聞に連載された「新・人国記」の「青森県」の書き出しである。これを拝借して2000年に『どさ』『ゆさ』と書いたことがあった。YはもちろんYMCA、私にとって、ワイズメンズクラブでもあった。YMCAに行けば仲間がいて、出合い、語り合いがあり、怒ったり笑ったりしながらプログラムを楽しみ、学びと親睦を深めてそれが活力になった。現在は「Yさ」とは言い難く、いわば得意技が封じられた感がある。問いかけて同じ津軽ことばの「どひゃ」と変えたらどうだろう。「なににしてる」「なにをしようとしている」の意である。答えは当然多様であろうが、その中に「YMCAがこの社会に何が出来るか、何が共感を得られるかを考えたい」という回答が多くあつて欲しいと思う。「どさ」に「Y」と天下晴れて言えるようになった時、新たな取り口も持っていきたい。

「人口も産業も元に戻らざるを得ない。」

「コロナの影響もあり」

「ヨガ教室もされていますね。」

「おかげさまで石巻では、YMCAとワイズメンズクラブの名前が徐々に浸透してきました。子ども文庫には、近隣小学校の子どもたちも来てくれます。また石巻には、復興支援活動のために他県から来た若者がそのまます仕事を見つけて移住したケースもたくさんあります。今後はいろいろな団体とも手をつなぎ、震災復興支援を越えて市民力をつけ、町を活性化していきたいです。」

「雪の道を角巻きの影がふたつ。」「どさ」「ゆさ」。出合い頭の暗号のような短い会話だ。それで用は足りた。」「ああ、どちからまで」「どさ」「ちよつとお湯へ」「ゆさ」。60年代初めごろ朝日新聞に連載された「新・人国記」の「青森県」の書き出しである。これを拝借して2000年に『どさ』『ゆさ』と書いたことがあった。YはもちろんYMCA、私にとって、ワイズメンズクラブでもあった。YMCAに行けば仲間がいて、出合い、語り合いがあり、怒ったり笑ったりしながらプログラムを楽しみ、学びと親睦を深めてそれが活力になった。現在は「Yさ」とは言い難く、いわば得意技が封じられた感がある。問いかけて同じ津軽ことばの「どひゃ」と変えたらどうだろう。「なににしてる」「なにをしようとしている」の意である。答えは当然多様であろうが、その中に「YMCAがこの社会に何が出来るか、何が共感を得られるかを考えたい」という回答が多くあつて欲しいと思う。「どさ」に「Y」と天下晴れて言えるようになった時、新たな取り口も持っていきたい。

赤三角

大声や長話が憚られる世の中である。雪の道を角巻きの影がふたつ。」「どさ」「ゆさ」。出合い頭の暗号のような短い会話だ。それで用は足りた。」「ああ、どちからまで」「どさ」「ちよつとお湯へ」「ゆさ」。60年代初めごろ朝日新聞に連載された「新・人国記」の「青森県」の書き出しである。これを拝借して2000年に『どさ』『ゆさ』と書いたことがあった。YはもちろんYMCA、私にとって、ワイズメンズクラブでもあった。YMCAに行けば仲間がいて、出合い、語り合いがあり、怒ったり笑ったりしながらプログラムを楽しみ、学びと親睦を深めてそれが活力になった。現在は「Yさ」とは言い難く、いわば得意技が封じられた感がある。問いかけて同じ津軽ことばの「どひゃ」と変えたらどうだろう。「なににしてる」「なにをしようとしている」の意である。答えは当然多様であろうが、その中に「YMCAがこの社会に何が出来るか、何が共感を得られるかを考えたい」という回答が多くあつて欲しいと思う。「どさ」に「Y」と天下晴れて言えるようになった時、新たな取り口も持っていきたい。

東京Y M C Aが出会った方々の"今"

東京Y M C Aが東日本大震災復興支援活動とおして出会った方々に、当時のこと、今の暮らしやお考えのこと、次代に伝えたいことを伺いました。(文・広報室)

■仮設住宅でのつながりから

家は失った。でも心の財産増えた

私の家は津波で流されてしまったので、震災から5年ほど渡波(わたの)の仮設住宅にいました。命は助かったもののショックでもできず、心配した息子が買ってくれたピアノを弾いて過ご

していました。そんな時Y M C Aの皆さんが仮設の集会所に来て、歌の広場やヨガなど、たくさんのイベントをしてくれました。お茶を飲んでお話しした「お茶っこ」も楽しかったです。職員伊藤

君(II写真)は、息子みたくによく家に来てくれた。洗足学園の学生さんたちが弾いてくれたピアノは今も覚えてます。会員の皆さん、清泉女子大学の学生さん、いろいろな人が訪ねてくれた。そんなつながりから東京に行く機会もできました。家財は全部失ったけど、私は皆さんと友だちになれた。本当にいい友だちを授かって、世界が広がった。皆さんからいただいた手紙や写真は全部とってあります。私の宝です。何にもお返しはできませんが、おかげさまで私は楽しく生きています。今は復興住宅にいます。スパーや学校もでき

て立派な町になったんです。道路も広くなつてどこ歩いてんだかわからないほど。何十年も住んでた町とは思えない新しい町になりました。古い友だちと一緒に仮設で暮らしてた人たちは、みんな「てんでん」に離れてしまつて会えなくなつてしまつた。寂しいけど仕方ないから、復興住宅の集会所に出かけて新しいお友だちを作つて楽しんでます。音楽サークルを作つてピアノを弾いたり。ペビィサークルで若いお母さんたちと歌ったり。

でも、もう84歳ですがね。急に昔のことを思い出して、「あの桐の箱はどこだっけ」と部屋のなかを探して、「ああ、流されたんだ」なんて気づくこともあります。大事にしてた物は覚えてるんですね。昔のことは忘れられない。年とともに思い出



石巻市在住 西村 富子 さん

すんですよ。それでも、悔やんでばかりいたら本当に生きていけなくなつてしまう。だからとにかく必死に前を向いて、何でも積極的に、楽しく生

きてようと思つています。東京の皆さん、コロナが収まったら家に遊びに来てほしいね。あの頃よりもちゃんご馳走します。



「テラープログラム」で石巻を訪れた米国高校生たち(2014年)千葉瀬奈さんは前列左2番目



石巻市仮設住宅での交流プログラム「お茶っこ」(2013年)。写真左が西村富子さん



「のんびり親子リフレッシュキャンプ」は放射能で外遊びが制限されたご家族等を対象に2019年までに計82回実施、延べ3000人が参加された。写真は2013年度の様子。左端が鈴木孝孝くん。

■教会での活動をおして

困難の中、新しい道信じて祈る

私は震災当日、東京神学大学の卒業式に出てい



日本キリスト教団 石巻山城町教会牧師 関川 祐一郎さん

ました。卒業後は牧師として、石巻山城町教会に赴任することが決まっていたので、予定どおり石巻に来たのですが、実際に見た被災地は想像以上でした。報道では分からなかつた震災のリアリティーに圧倒されて、私は怖くなりました。被災していない自分は、被災者に何と声をかけたらいいのか。牧師として何ができるのだろうか。

そんな時、Y M C Aの皆さんがワークキャンプにみえたので、私も一緒に泥かき作業に参加しました。被災地で途方に暮れていた私にとって、一緒に働けたことは大きな励みになりました。Y M C Aはその後も教会で子どもの学習プログラムなどをしてくださり、そんなつながりから私は石巻広域ワイズメンズクラブに入会。今もメンバーとして活動しています。この10年、私は心の復興とは何かを考えてきました。単純な答えが見つかりません。

■テラー米国派遣プログラムに参加 海外での体験 今も活きる

私は震災から1年後、中学3年生のときに「Y M C Aテラー米国派遣プログラム」に参加しました。これは、津波で亡くなった英語教師テラー・アンダーソン先生の故郷を訪ねるプログラムで、私は先生が生まれ育ったリッチモンドを見てみたいと思って応募しました。テラー先生

のお父様はリッチモンドY M C Aの役員をしていて、「日米の懸け橋になる」としての娘の遺志を継ぎたい」とおっしゃり、私たちを歓迎してくれました。ご両親をはじめ、現地Y M C Aの方々や先生の出身の生徒たちと交流できたことは、私にとって大きな財産となりました。



石巻市出身 千葉 瀬奈 さん

帰国後、私は英語を勉強するようになり、2年後にアメリカの高校生たちが日本に来たときにはホストファミリーを引きました。大学生になつてからも、この時に出会った「TOMODACHI HI(トモダチ)イニシアチブ」に関わり、リーダーシッププログラムに参加したり、高校生参加者のメンターなども務めました。ベトナムでインターンもしました。大学では看護学を学びました。災害看護に関心があり、神戸に行って災害について学んだり、防災や減災についても勉強しました。今は、地域包

括ケア病棟で高齢者の看護を担当しています。体の中から健康をサポートできるように、薬膳コーディネーターの資格も取りました。 当時出会った皆さんとは、今でもSNSや手紙を通じて交流を続けています。こうして大人になつてもつながり続けられること、そのつながりからたくさんの経験ができたことは本当にすごいです。とだと思ひ、感謝しています。新型コロナウイルスが収まったら、またホストファミリーに会いに行きたいです。(聞き手・ぐんまY M C A総主事 村上祐介) ※震災復興支援を機に米日カウンシルと在日米国大使館の主導で作られた、次世代育成のための官民パートナーシップ

東日本大震災10年

これからも「共に喜び、共に泣く」

東京YMCA総主事 菅谷 淳

今月で東日本大震災から10年、各地で追悼式や記念会が行われていますが、10年ひと昔、あの大地震と津波、原発事故は私たちの記憶から徐々に薄れているのも事実です。そこへ警笛を鳴らすかのような2月13日深夜の震度6強の大地震。宮城や福島

の皆さんは恐怖で眠れない夜を過ごされたのではないのでしょうか。「天災は忘れた頃にやってくる」は科学者であり随筆家である寺田寅彦さんの有名な言葉です。彼は関東大震災をきっかけに災害に興味を示し、防災についても多くの随筆を残しました。1933年に発表した「津浪と人間」では、「こういう災害を防ぐには、人間の寿命を十倍か百倍に延ばすか、地震津浪の週期を十分の一か百分の一に縮めるかすればよい。そうすれば災害はもはや災害でなく五風十雨の亜類となってしまうであろう。しかしそれが出来ない相談であるとすれば、残る唯一の方法は、人間がもう少し過去の記録を忘れないように努力するより外はないであろう」と述べています。

「忘れないように努力すること」それは悲しみに暮れる被災地の人々にとっては辛く苦しいことかもしれません。聖書には「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」(ローマの信徒への手紙 第12章

15節)」とあります。東日本大震災の後、この聖句を胸に、東京YMCAは仙台YMCAと協力し「YMCA石巻支援センター」を開設しました。ボランティアワークキャンプ、暗闇を照らすランタンプロジェクト、タオルケットキャンペーン、石巻小学校プール開放の手伝い、女川での高校生の居場所作り、小学生英語クラス、女川夏まつりでの模擬店、仮設住宅での歌の広場などなど、この10年間繁閑はありましたが地元の人たちに直接寄り添い、共に喜び共に泣いてきました。それは「私たちは皆さんを忘れていません」というメッセージと、「再び災害が起きたら同じように助け合いましょう」という、顔の見える信頼関係＝「絆」を確かなものになりたいという思いからです。

「天災は忘れた頃にやってくる」そのため「備えあれば憂いなし」の精神が大切です。その時の備えで重要なのは過去を忘れないことと、災害が起きたらすぐに立ち上がって助け合うことではないでしょうか。そしてこの助け合いに欠かせないのが「絆」であり、この一朝一夕では築かれない「絆」をこれからも意識してプログラムを展開し、「共に喜び、共に泣く」ことがYMCAに求められていると切に思います。

■リフレッシュキャンプ参加者 負の遺産 残したくない



郡山市在住 小林 真澄さん

今の郡山市はすっかり落ち着いて、震災があつたようには見えなくなりました。福島だからと敬

遠されることもなくなつて、他県から引越してくる人も増えています。小さいお子さんを連れて

いる方などは、ときどき放射能を心配しています。放射能の話はタブー

だ気にしてはいるの？と言ふ雰囲気もあつて、日常会話からはなくなりました。

Aって何？ リーダーってどんな人？」と思いましたが、よくトレーニングされて一生懸命に子どもと遊んでくれたので、私も安心して他のお母さんたちとお話でき

た。子どもたちも楽しかったよ。今もリーダーたちのことはよく覚えて

います。上の子は高校生、下は中学生になりました。私よりも背が高く

なっています。この10年は、とにかく子どもたちのために頑張ろう、10年経てば何とか

■リフレッシュキャンプ参加者 助け合う心、忘れません



いわき市在住 鈴木 睦美さん 鈴木 壮孝さん

いわき市は、原発で働く方や避難してきたご家庭も多く、新しいコミュニティ

もできてきたりと今も復興パブルが続いています。でも昨年から

は、東日本大震災よりも台風19号の話題が増え

ました。広域にわたって浸水があり、断水も続いたので、その中で震災

の経験が活かされました。

た。各家庭では水などを常備してましたし、ツイッターで情報を得たりと、対応がスムーズでした。みんなが痛い思いをして得た知恵が活かされ

たと思います。もう一つ、震災の経験が活かされたと思ったのはボランティアでした。YMCAのリフレッシュキャンプに参加させて

会員活動 オンラインで開催

■子育て講演会「子どもの心のぞいてみませんか」

りんごの木・柴田愛子氏



YMCAの会員・職員有志による「第15回子育て講演会」が1月26日、YouTubeによるライブ配信形式で実施され、105人が視聴しました。講師は子どもクラブ「りんごの木」代表でテレビ等でもお馴染みの柴田愛子氏。「子どもの心をのぞいてみませんか～子どももなかなかたいしたもの

です」をテーマに、コロナ禍でストレスを抱える保護者に向けて「〇〇すべきという”べきお化け”に振り回されないで。実現不可能な理想的親子像を背負わずとも、子どもは育っていく力をもっています」等と温かく語りかけられました。視聴者アンケートには「日々の子育てが楽しくなるコツを聞くことができた」「オンラインだったので気軽に参加できた」などの声が寄せられました。開催にあたり多数の企業から協賛いただきました。詳しい報告はホームページをご覧ください。

(会員部 小松康広)

■会員協議会「ソシアス2020」 57人がzoomで参加

年に一度、YMCAの課題や方針などについて会員と職員が自由に話し合う「会員協議会『ソシアス2020』」が2月11日、オンラインで開催され、会員・職員57人が参加しました。テーマは「今、私たちにできること」。昨年度の協議会で提起された3つの議題、すなわち「①YMCAの良さを社会に広めるには」「②会員だけでなく多くの地域の人たちに関わってもらうには」「③今だからこその活動は」について分団協議を行ない、意見交換をしました。

コロナ禍により、YMCAが大切にしてきた人と人との出会いが制限され、キャンプや歌の広場などプログラムも中止や変更を余儀なくされている中ではありますが、貧困や孤立、子どもたちの健康、災害対策など、地域の課題は山積しており、YMCAはこれらに寄り添った活動を展開する責務があること。地域のニーズに応え、人と人をつなぎ、また居場所となる活動を展開していくべきこと。結果としてYMCAの良さが社会に広まっていくこと。——オンラインでの開催でしたが、議論は多岐にわたり、また久しぶりの交流も楽しむひとときとなりました。

